

ワークショップ形式による学生のボランティア活動とキャリア形成

石田 戡

帝京科学大学

How to link University Students Volunteer Activity with their career improving by Workshops

Osamu ISHIDA

Teikyo University of Science

Key Word：ネットワーク、コミュニケーション、自然体験、人間性の形成、実践、地域との連携

本学、アニマルサイエンス学科では、各種学外活動、特にボランティア活動を奨励しているが、これはその活動によって在学期間から多様な社会的活動を行い、多様な社会的経験を積ませることにより、社会性を獲得して、コミュニケーション能力を向上させることを目指している。しかしこれらは経験的に実施されるにとどまっており、それを体系化してよりレベルの高い経験とするために、各方面の専門家とのワークショップを行い、討論・意見交換を行うこととした。

ワークショップは、平成24年2月から3月にかけて、5回にわたり本学内で実施したが、その成果を以下に報告する。

第一回ワークショップ

「動物保護、動物調査のボランティア活動とキャリア形成」

1. 開催日

平成24年2月24日(13:40～16:50)

2. ワークショップゲスト

田畑 伊織(奥多摩でカモシカを調査)、
鳥屋尾 健(キープ協会)

3. ワークショップ参加者

小林毅教授、帝京科学大学学生 12名

4. ワークショップ内容

- 1) オリエンテーション
- 2) この分野(動物ボランティア)にはどんな活動がある?
- 3) どのような(どのように)キャリア形成につ

ながっていくか?

- 4) 学生がどのような心構えで活動に参加したらいいか?

5. ワークショップ内容の概要ゲスト活動経歴の紹介、本ワークショップで扱うキャリアとは何かについてディスカッションを行った。ここでいうキャリアとは、社会経験や専門技術経験、人脈・ネットワークなどを取り扱った。

- 1) 動物に関係するボランティアを列挙。飼育・愛玩動物のボランティア(被災ペットの代替飼育・アニマルセラピー・使役動物の飼育やしつけなど)、野生動物保護管理(駆除や個体数調整など)、動物の研究(解剖や生理学実験など)、傷病鳥獣の救護活動(鳥獣保護センターや里親ボランティアなど)、野生動物の調査活動(生態学や行動学など)、野生動物の保護(共生や環境教育、保護作業など)など。
- 2) ボランティアの語源は自発的を意味するボランティアという言葉である。ボランティアを行うことで、自分の成長につながり、取り組んだ物事の状況を知るきっかけにもなる。また、複数人でボランティアを行うことで、集団行動ができるようになり、仲間や専門家といったネットワークができる。これらのメリットがボランティアを行う上でのキャリアとなるのではないかと考えた。
- 3) 今回、実際にボランティアを受け入れる立場のゲストからお話を伺い、学生のボランティア活動を行う上での心構えを討論した。
自発的な活動なので、責任感を持つことが必要。連絡もなくドタキャンというケースが

過去にあった。受入側も準備や段取りがある。

活動の目的を明確にして受入側に伝える。準備や体制づくりにつながり、参加する本人も意識して活動に臨める。

望んでいることはきちんと伝え、受入側から情報や人脈、機会を与えられる。

6. 最後に

学生が参加するボランティアであっても、より質の高い活動を求めるべきであることがあらためて明確になった。また参加する人の狙いや受入側の狙いなど、すれ違いにならないように常に気をつけるべきであることがわかった。

第二回 ワークショップ

「学生のボランティア活動をキャリア形成につなぐ」

1. 開催日

平成 25 年 2 月 26 日 (10:00 から 15:00)

2. ワークショップゲスト

伊藤真樹 (木工工房主宰)、

小野敦 (グリーンウッドワーク協会事務局長)

3. ワークショップ参加者

帝京科学大学の教員	2 名	
学生 (本学)	12 名	
一般参加者	2 名	計 16 名

4. ワークショップ内容

- 1) オリエンテーション
- 2) グリーンウッドワークのプログラム体験
- 3) グリーンウッドワークの紹介およびボランティアの関わり方
- 4) ディスカッション

5. ワークショップ内容の概要

- 1) 自己紹介と体験プログラム (指輪作り) の説明
- 2) 足踏み轆轤を活用して、人力のみで生木を加工し、指輪作りを行った。生木には桜の木を使用。自分で木を切り、幹に穴をあけ、轆轤とナイフを使い削る。削ったあとは艶を出すのに木屑で磨く。生木を使っている、木屑の水分が木をピカピカに磨く。
- 3) グリーンウッドワークには、「乾燥させない生木 = Green Wood を使う」、「電気を使わずに地球

にやさしい = Green である」という意味が含まれている。また、グリーンウッドワークのメリットは、屋内外を問わずに活動することが可能であり、どんな木も材料にすることができることにあり、子供も大人も安全に楽しめるなどがあげられる。一方デメリットとしては、生木の扱いが難しいことがあげられるが、これは森と人が繋がれるという点で処理できる。

伊藤さんと小野さんからは、障害を持つ人の参加や木材を提供してくれる地域の人のつながりができるといったお話があり、木を使う工作だけという意味ではないことが理解できた。

- 4) グリーンウッドワーク協会の例として、NPO という言葉のイメージにはボランティアであるという意味が含まれている。当協会自体にボランティアと社員の両方が関わっており、様々な考えが混在している。ボランティアの考えには、技術習得などの研修のため、趣味や生活のため、人の役に立てることがしたいなどなどがあげられた。また地域の人が無償で活動に必要な木材を提供してくれているケースもあり、こういった地域の人と関わりも重要である。

6. 最後に

今回の特徴は、グリーンウッドワークという貴重な体験を通して、学生だけでなく、参加した全員が様々な思いを持ったことにある。

討論の時間では、ゲストからのお話だけでなく、ボランティア自体の意識に関する話が出された。社会がボランティアに何を求めているのかにもよるが、学生にはボランティアを行う意味を考える機会になった。

第三回 ワークショップ

「災害救援ボランティア活動を通じた人の成長、市民参加活動の現状とこれから」

1. 開催日

平成 25 年 2 月 28 日

2. ワークショップゲスト

中垣真紀子：NPO 法人エコツーリズムセンター事務局長。東日本大震災では RQ 災害救援センター事務局。

李妍焱 (Ms, Li, Yan-Yan)：駒澤大学環境学部准教授。NPO などの市民活動やボランティア活動などの研究者。

3. ワークショップ参加者

小林毅（本学教授）、帝京科学大学学生 9 名
計 10 名

4. ワークショップ内容

- 1) オリエンテーション
- 2) 災害ボランティア活動を通じた人の成長（中垣さん講演）
- 3) 市民参加活動の現状とこれから（李さん講演）
- 4) 全体ディスカッション

5. ワークショップ内容の概要

- 1) ゲストや参加者の自己紹介と、今回のワークショップの目的共有を行った。
- 2) 中垣さんの海外でのボランティア経験や災害ボランティアの経験・効果などについて講演していただいた。たくさん写真やイラストが使われたパワーポイントでの発表に参加者一同聞き入っていた。また、被災者としての経験を隠すことなく伝えてくださり、身の引き締まる思いがした。
- 3) 李さんから中国の市民活動やそれを導く社会的背景などについて合わせて講演していただいた。私たちが知らなかった中国の内情や、背景を垣間見ることができた。さらに、中国で行われている市民活動についての具体的な事例についても紹介してくださり、とても興味深い活動が数多く行われていることが見て取れた。
- 4) ディスカッションの場では、お二人の発表についての質疑応答から始まり、主に中国と日本との違いについてお話を伺った。

6. 最後に

はじめは講義形式をとり、ディスカッションでは全員が円卓式で行った。小林が、時折問題点を整理しつつ討論を深めた。

今回のワークショップで得られた、ボランティアとキャリア形成にかかわることには、以下の点である。

- ・災害ボランティア活動で得られる成長はとて大きく、学生は積極的に参加することが望ましい。
- ・日本の学生は自分たちの時代のために自分たちが考え、イノベーションを起こしていかなければならない。
- ・知らないことを知ろうとするチャンネルを開くことが大切である。

第四回 ワークショップ

「教育関係ボランティアとキャリア形成」

1. 開催日

平成 24 年 2 月 29 日

2. ワークショップゲスト

増田直弘：財団法人キープ協会インタープリター。

古瀬浩史：株式会社自然教育研究センター取締役。

3. ワークショップ参加者

小林毅（本学教授）、帝京科学大学学生、
一般の方 計 7 名

4. ワークショップ内容

- 1) オリエンテーション
- 2) 全体ディスカッション

5. ワークショップ内容の概要

- 1) ゲストやコーディネーター、参加者の自己紹介や関わってきたボランティア活動についての共有を行った。

参加者からは、観察会や動物園水族館、博物館での解説活動、自然の家でのボランティア活動、さらに鳥獣保護センターでの保護活動等、実践している様々なボランティア活動が挙げられた。ゲストからは、これまでにどの様にボランティア活動と関わってきたのか、ボランティア活動について思う事などをお話し頂いた。

増田：「現場だから知れることがある」

古瀬：「人生の各フェーズで関われるボランティア活動がある」

小林：「仕事の半分はボランティア活動の様なもの」

- 2) 教育的なボランティアで得られるものは何か：教育的なボランティア活動で得られるものを挙げ、教育的なボランティア活動と他のボランティア活動との違いについて話し合った。話合いの中で出た意見は、小林が大判ホワイトボードを活用し、結果を視覚化することで整理していった。

ボランティア活動が社会人となった時つながらること：採用面接でボランティア経験について聞かれることの意図や、ボランティア活動が社会人になった後にどう繋がっていくのか話し合った。

ボランティア活動に関わる上での心構え：より上手くボランティア活動を実施していく上で、ボランティアをする側、受け入れる側のそれぞれに必要な心構えや取り組み方のアイディアについて話し合った。

6. 最後に

今回のワークショップは、ゲストを含めた参加者が一つの輪を作り、終始ディスカッションを行うという形式をとった。

学生ボランティアをキャリア形成につなぐというために分かったことは以下の通りである。

- ・面接のとき聞かれることの意味

人との協働ができるかどうか、持っている関心は何か、社会参加への意欲があるか、といったようなことを知る為に、採用面接でボランティア経験を質問する。

- ・良い活動良い経験とするための心構え

受け入れ側が、ボランティアに更なる活躍を期待してくれるような団体でボランティア活動をし、向上心をもって積極的に活動するのがよい。また、受け入れ側とボランティア側で、それぞれのあり方や関わり方を確認することが大切である。

- ・教育的ボランティアの特色

ボランティアとしての若いキャンプリダー（子どもとの距離が近い）だからできる事があり、期待度が高い。ボランティアが接する対象もお客さんであるため、専門性だけでなく人間性のようなトータルなバランスがより求められる。また、結果や成果が見えづらく終結を設定することが難しい。

第五回 ワークショップ

「東日本大震災災害救援ボランティア活動とキャリア形成」

1. 開催日

平成 24 年 3 月 1 日（13：40～16：50）

2. ワークショップゲスト

加藤大吾：都留環境フォーラム代表理事
名もない救援隊隊長

萩原裕作：岐阜県立森林文化アカデミー

3. ワークショップ参加者

帝京科学大学の学生 18 名

4. ワークショップ内容

- 1) 自己紹介
- 2) 災害救援を行うきっかけ
- 3) 行動を起こす契機

5. ワークショップ内容の概要

- 1) 自己紹介と震災時の状況

2) 萩原さんは、きっかけというきっかけがなく、震災直後に何かをしなければと思い立った。ご家族の方も支援をすぐに開始していた。RQ を立上げ、現地の状況を予想しながら何ができるかを考えた。周囲の人も話を持ちかければ、行動を起こせば、それに連なって変わっていく。これまでの生活スキルやアウトドアスキルが想像を超える状況で生きてくる。

加藤さんは、震災の状況下で自分が動ける状態にあることが救援活動の始めだった。行政が被災地すべてを補うことはできないからこそ、動ける人間が補えない部分をカバーする。名もない救援隊の活動。出来ることをなんでもやっていいということで活動の抑制がなくなり、自分が考える活動になった。救援活動において行政と自衛隊が大きく関わっているが、双方で活動を行う範囲が異なるので、NPO がその間を埋めることになる。

- 3) 災害救援の活動中心だが、何事においても行動を起こすことの契機に繋がるような議論が行えた。自分が置かれている状況を受け止め、日常的に動ける状況にあるかを確認。また、そのために時間を割けるかどうかの判断。情報収集によって自分の持つ力を発揮できるかがわかる。行動を起こすことでどんないいことがあるかをイメージし、やりたいと思った時に、それがスイッチになり行動を起こした。

自分の役割をしっかりと理解する必要がある。現場に行くだけが救援活動ではない。自分に出来ることを行うことが必要。

6. 最後に

行動を起こすことは、やってみないとわからないことがある。やってみて自分に合わないことを知るのも収穫の一つ。限界を決めずにいろいろなことに挑戦する。小さいことからコツコツとする。人の力が人を動かす。行動の行程が重要ではなく、やったということが重要。行動を起こすときに、断られるのではない

かというネガティブは一度何処かへ置いておく。なんとかなることのほうが多い。

全体を通じたまとめ

5回にわたる講義とワークショップの中で、学生が得られたことは以下のようにまとめることができる。こうした経験を共有化することによって、学生のボランティア参加の意義を高めることができると思われる。

1 ボランティア活動への参加意識と行動

- ・ただ参加するだけではなく、常に向上心と目的を自覚して行動すること。
- ・受け入れ側の状況を的確に把握して、常に意思疎通をおこなうこと。
- ・社会には学生生活では知りえないことがあり、それらに触れるチャンスを拡大していくべきこと。
- ・行動に意欲をもって、実際にやってみることは極めて重要である。

2 ボランティアの本質的意味について

- ・ボランティアとは、自分が好きで行うことだけではなく、常に社会的に求められていることに対応していかなければならないこと。
- ・その中で、自己のキャリアアップを自覚的に形成していくべきこと。
- ・ボランティアは見知らぬ人と接する場であり、人との協働、個人の関心、社会参加への意欲が形成される場であること。
- ・災害は、人が究極状況に置かれていることもあって、もっともボランティア活動が必要とされ、またそこで得られる内容は極めて大きく、したがって成長の機会でもある。